

蕎麦切 芭蕉庵

～ 夢は枯野をかけ巡る ～

ほしひかる

(江戸ソバリエ協会 江戸ソバリエ認定委員長)

I. けんどん蕎麦

俳聖松尾芭蕉(1644～1694)は、伊賀上野(三重県伊賀市)の松尾家次男として生まれた。先祖は伊賀の古くからの地侍だったという。

芭蕉(伊賀上野時代の名は宗房)は故郷では秀才として知られており、いつのころからか京の貞門(松永貞徳派)俳諧を身に付けていた。そのため藤堂家へ俳諧のお相手として出入りするようになった。宗房にとって社会への第一歩ではあったが、仕官ではなかった。才豊かであっても、やはり古族の次男坊宗房の、伊賀上野での居場所はなかった。

1672年(29歳)、宗房は自分の人生を切り拓くべく新都江戸へ下る決心をした。それに先立ち日本橋本船町の名主小沢太郎兵衛(俳号:卜尺)や小田原町の魚問屋杉山藤左衛門(俳号:杉風)などに伝手を求め、また俳諧集『貝おほひ』を自費出版しようとしっかり原稿もできあがっていた。というから計画的意欲的な江戸行であった。

その江戸では新しい談林(西山宗因派)俳諧が盛んであった。古い貞門俳諧に物足りなさをもっていた宗房は、談林へ転向した。つまりはこれまでと違って新都、新俳諧という新しい世界へ足を踏み出したのであった。

俳才があった宗房はすぐに頭角を現していった。そして1677年(34歳)に万句興行を行い、宗匠として立机することとなり、延宝3年ごろから桃青と号するようになった。

そのころの住まいは、神田駿河台、本郷、日本橋の小田原町などだったと伝えられている。小田原町では現在の日本橋三越から昭和通りの間に辺りに住んでいたらしい。今でいえば都心である。ここからも桃青の意気込みがうかがい知れるというものである。また神田川の水道工事系の事務を手伝うために小石川にも一時住んでいた。現在の椿山荘の近くの「関口芭蕉庵」である。

そんな桃青時代にこういう句がある。松尾芭蕉として最初の蕎麦の句だから、ソバリエとしては見逃せない。

前句 鉢一ツ 万民^{これ}是を 賞翫す 似春

附句 けんどん蕎麦や 山能井の水 桃青

(高屋知久著『還魂紙料』下巻 1826年刊)

これは『還魂紙料』の下巻の「五、慳貪」の項に載っている句である。著者の高屋知久(1783～1842)とは戯作者の柳亭種彦のこと。柳亭種彦は、この句を延宝年間の作として紹介しているが、おそらく1679年(36歳)ごろの作と思われる。

また「慳貪蕎麦」は下賤の者が食べると書いていて、以来これらが引用されて定説のようになってしまったが、江戸ソバリエとしては少し解釈を加えたい。なぜなら柳亭種彦がこれを発刊した19世紀ごろは江戸には高級蕎麦店と俗にいう屋台蕎麦があったため、種彦は慳貪蕎麦を屋台蕎麦と同じようなものと解した節がある。

しかし史実理解は当時の江戸初期に行ってみなければならない。話は、およそ150年ほど昔に遡る。

1657年、江戸は本郷本妙寺から出火し大半が焼けた。いわゆる「明暦の大火」である。この大火の後ごろ、浅草待乳山聖天の門前に「奈良茶飯屋」が開店した。つまりは飯を売る日本初の外食屋が誕生したのである。その直後から、けんどん蕎麦屋、正直蕎麦屋などの蕎麦屋が日本橋や浅草で開業した。後でもまた触れるが、【寺方蕎麦】の後段の蕎麦切だけを切り離してそれを売る商売がこのころ始まったのである。日本外食史から見ても画期的な出来事であった。後代のことを引き合いに出すのは逆だと思うが、フランスで外食店ができたときも似たようなことだった。18世紀末、フランスの市民革命で宮廷が没落したとき、宮廷料理人たちはパリの街中でコース料理からスープだけを切り離してスープ屋を開業した。これがフランスでの外食店一号だった。話を江戸初期に戻せば、17世紀半ばの江戸で外食店ができて、食べ物を銭を払って食べようという行為は保守層の者はしなかった。でかけて行ったのは、だいたい進取の気象をもつ人間だったのである。それが「下賤者が食べた」と誤解される理由であったことを指摘しておきたい。

桃青が詠じた「けんどん蕎麦」とは、このころに開業して間もない蕎麦屋の蕎麦のことである。また似春の「鉢一ツ」というのは「木椀」に分けた商品としての蕎麦のこと。当時の寺方蕎麦は、汁と蕎麦麺が木椀に入っていた。それを和えて食べるのであるが、桃青は「山の井」という「浅い」の枕詞を使って、寺方蕎麦を切り離して気軽に食べられるようになった蕎麦屋の蕎麦を表現している。ここが三流俳諧師の言葉遊びとちがって、若いながらも桃青の教養豊かな才に、皆が尊敬の念をもって接するようになった所以である。いずれにしても蕎麦屋は田舎の伊賀上野では見られない、新都江戸ならではの珍しい商いであった。新しさを求めている桃青は驚きながらも「蕎麦屋」に注視したのがこの句である。なお、小西似春(1688～1704)は芭蕉と古くから交流があり、後に下総の行徳で神主になった人物である。

II. 会席蕎麦切

江戸にやって来た桃青はそれなりに順調だった。俳諧教室の先生として贅沢さえ望まなければ食べていけるようになった。伊賀上野時代より満足であった。しかし鋭い透視力をもつ桃青は、このままでいいのかと自分に問いかけた。その挙句、思い切って都心を棄て、川向うの深川の草庵に移り、小市民的で平穏な生活と決別し、風狂の日々をおくることにした。1681年(38歳)のことだった。そのころたまたま庵に芭蕉株を贈られ植えたことから「芭蕉庵」と号するようになった。



〔隅田川畔の芭蕉庵跡〕



〔芭蕉庵：ほしひかる絵〕

この庵で、芭蕉は莊子(戦国時代)の思想や、杜甫(盛唐)・李白(盛唐)・蘇東坡(北宋)・黄山谷(北宋)の詩を愛読したり、近くの臨川庵(江東区清澄 3-4-6)にて仏頂和尚(1641～1715)に参禅したりしていた。もちろん慕う弟子たちがたくさん訪れていた。

ところが1683年、江戸はまた大火に見舞われた。出火は本郷駒込の大円寺、江戸の大半が焼野原となり、死者3,500名あまりが出た。いわゆる「天和の大火」である。被災者のなかに、あの「八百屋お七」の顔があったことはよく知られている。炎は深川にもおよび芭蕉庵は焼けた。そのため芭蕉は甲斐の谷村(都留市)の秋元藩の家老高山伝右衛門(1649～1718;俳号麁埒)宅に半年あまり世話になった。

野ざらし紀行(甲子吟行) 芭蕉41歳～42歳 貞享元年3月～貞享2年4月
鹿島紀行 芭蕉44歳 貞享4年8月
笈の小文 芭蕉44歳～45歳 貞享4年10月～貞享5年4月
更科紀行 芭蕉45歳 貞享5年3月
奥の細道 芭蕉46歳 元禄2年3月～3月



【芭蕉庵：ほしひかる絵】

江戸に戻ってきた芭蕉は、悟ったと思われる。被災しなかった地方では世話になることができたが、被災地の江戸はそれどころではなかった。つまり俳諧は、今でいう不要不急の遊び文化であることを…。ならばさらに俳諧を深めようと決心した芭蕉には、大火で庵を類焼させたところから「無所住」の思いが芽生えていた。そこへ昨年亡くなった母の墓参の機会が重なった。

芭蕉は帰郷の旅に出ることにした。しかし、それは新しさ探究のための旅、いわゆる「旅の詩人芭蕉」の始まりであった。

1684年41(歳)、昔の人の杖にすがりて、芭蕉と門人の苗村千里(1648～1716)は『野ざらし紀行』の長い旅へ出た。

馬に寝て 残夢月遠し 茶の煙

(小夜の中山にて『野ざらし紀行』)

小夜中山(静岡県金谷辺り)に行く芭蕉は杜牧の詩「早行」に思いを寄せ、茶の煙と月の距離感を詠じた。茶の煙は月に届かない。茶の寂びは形であるが、芭蕉の寂びは色である。茶と俳諧は近いようだが離れているとの言いであろうか。

この後は、伊勢、伊賀、大和、美濃、桑名、熱田、名古屋、京、大津と足を延ばし、9ヶ月の野ざらしの帰途に着いた。この長き旅路に芭蕉は、「無所住」の心境地を得ることができた。それゆえにこの後も芭蕉は旅の人生を歩み続けるのである。

つまり1687年(44歳)の『鹿島紀行』、『笈の小文』の旅、1688年(45歳)の『更科紀行』の旅の途である。

そして芭蕉は1689年(46歳)3月27日、河合曾良(1649～1710)を伴い『おくのほそ道』の旅に出た。



【採茶庵】



【仙台堀川】

二人は深川の「採茶庵」を出て、近くを流れる仙台堀川から舟に乗り、隅田川を経て千住から陸路を歩いた。

行く春や 鳥啼き魚の 目は泪

これが旅の初日の句である。

そして4月22日、芭蕉と曾良は白河の関に着いた。

昔から、白河の関までは東の国、これより奥は陸の奥といわれていた。だから芭蕉は旅日記を『奥の細道』とした。

4月23日、芭蕉と曾良は須賀川の豪家相良等躬(1638～1715)を訪ねた。そして翌24日は、等躬の紹介で僧可伸(号:栗齋、本名:矢内弥三郎)の庵を訪れた。可伸は大きな栗の木陰の庵に閑かに暮らしていた。

世の人の 見付けぬ花や 軒の栗



〔可伸庵跡〕



〔ほしひかる絵〕

芭蕉は可伸の人柄とその隠栖暮らしに深く共感し、連俳一卷を巻いた。

その折、吉田等雲が会席を設け蕎麦切を振舞ってくれた。そのときの蕎麦切はどのようなものだったか？

蕎麦切は留学僧が南宋の点心料理(饅・麺・茶・菓)をわが国に持ち込んだことから始まり、そこから会席などでは後段として最後に振舞われるようになっていた。

芭蕉が生まれる少し前の1622年12月4日昼、大和郡山の塗師松屋が大和郡山藩の奥平金弥に招かれたとき、後段の蕎麦切を振舞われた、と茶事記録『松屋会記』に記したごとく、俳諧の席でも同様であった。

その蕎麦切は木椀に入っている生蕎麦を垂れ味噌で、和えて食するものであった。打ち方は今でいえば古流、蕎麦粉も料理も材料は地元産だったのだろう。

芭蕉と曾良は須賀川に遊び、7泊した。この長い逗留は、白河の関を越え、奥の国への旅の始まりに感銘してのことだとされている。

29日、二人は旅立ち、平泉、立石寺、最上川、出羽三山へと向かった。

1689年6月3日、芭蕉と曾良は手向荒町の近藤左吉の案内で羽黒山本坊若王寺の別当代である会覚阿闍梨と会い、中腹にある南谷別院(玄陽院)に6泊させてもらうことになった。

当時の羽黒山権現の別当は寛永寺の大円覚院大僧都法印公雄であったが、別当が寛永寺から現地へ赴任することはなく、別当代が当山の事実上の最高責任者であった。

6月4日の昼時、芭蕉と曾良らは本坊(伊弉諾山若王寺宝前院)にて「蕎麦切をご馳走になり、終わってから俳諧席が設けられた。

有難や 雪をかほらす 南谷

(『奥の細道』)

江戸時代以前の東北地方の蕎麦の史料はあまり見ないが、羽黒山は江戸の寛永寺の影響下にあったため、いわゆる「寺方蕎麦」の後段の蕎麦切が江戸からの客に振舞われたのだろう。

その羽黒山には中興の祖と呼ばれている人物がいた。第50代別当天宥法院(1591～1674)である。天宥は東叡山寛永寺の天海に師事したが、藩主酒井氏と対立し、1668年伊豆新島に追放された。芭蕉は、その天宥の追悼句を依頼されて詠じた。

その玉や 羽黒にかへす 法の月

(『真蹟懐紙』)

6月10日、再び本坊にて蕎麦切・茶・酒などをご馳走になり、二人は羽黒山を後にした。

奥の旅の道中、三度も蕎麦切を味わうことのできた芭蕉と曾良は、象潟、越後路、金沢、敦賀を経て、大垣に着いた。

旅程600里、日数にして150日にもおよぶ、大いなる「細道」であった。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり」で始まる「奥の細道」の旅は9月6日に終わった。

旅の初日千住での句は「行く春」であったが、最後は「行く秋」で締めて、伊勢を目指した。

蛤の ふたみに別れ 行く秋ぞ



III. 蕎麦畠

その足で芭蕉は伊勢の内宮に参拝し、伊賀、奈良を経て、12月24日京嵐山の向井去来(1651～1704)の別亭落柿舎を初めて訪れた。

落柿舎第2回目の訪問では、1691年(48歳)、4月18日から5月4日まで滞在し、有名な『嵯峨日記』を執筆した。



〔落柿舎〕



(ほしひかる絵)



～ 入口の壁に蓑笠が掛かっているときは去来在宅の印だったという～

1691年秋、芭蕉は門人の内藤丈草(1651～704)・河合乙州(1655～1720)らを随えて、近江竜が岡(大津市)の百姓荘右衛門(俳名:山姿)宅を訪れた。家には荘右衛門が丹精こめて作った見事な蕎麦が満開に咲いていた。



【蕎麦の花】ほしひかる絵

蕎麦も見て けなりがらせよ 野良の萩

(杏盧編『続寒菊』1780)

「けなりがる」とは羨ましがること。芭蕉は蕎麦も褒めながら、荘右衛門宅の萩にも心を奪われているという句である。

次の句は深川芭蕉庵での作といわれている。

元禄の初めごろ『廬山遺集』を学ぼうと芭蕉庵にやって来る人々の詠草を芭蕉が集めたと『三日月日記/序』にある。おそらく1692年(49歳)8月3日のことだったのだろう。芭蕉が蕎麦の句を残している。

このような白い蕎麦畠を芭蕉がどこで見たのかは分からないが、江戸深川芭蕉庵で集めた句ゆえに深川界限の実景だといわれていることを江戸ソバリエとしては見逃すわけにはいかない。

三か月や 地は朧なる 蕎麦畠

(『芭蕉庵三日月日記』1692年)

三日月に 地は朧なり 蕎麦の花

(可吟編『浮世の北』1692年)

三日月の 影を延すな 蕎麦の花

(義仲寺句碑)

三日月の 地は朧なり 蕎麦の花

(芭蕉撰『俳諧一葉集』1827年)

見わたすかぎりに咲く白い花が、三日月の光に淡く照らされ、地上は一面にほの白く朧に霞みわたっている、という隅田川畔の実景だろうか。それとも芭蕉の想像だろうか。

いずれにしろ、ここで芭蕉は、焼畑から考案された「畑」の字を避けて、白い田の「畠」を使っている。古来雪のようにと表現される蕎麦の花咲く景色は「畑」より「畠」がお似合いだ。だから私も「畠」の字をよく使わせてもらっている。

その蕎麦畠の白い花は本場中国では女精の化身に比喻され、山東省の民話に「蕎麦娘」などが存在する。その民話では、蕎麦畠で見た若い娘に若者が恋をする。しかし娘を気に入っていた怪物もいた。怪物は娘をさらった。それを若者が取り戻すという話である。また日本にも「蕎麦」という謡曲がある。蕎麦の精が歌人の藤原定家に恋をするといった内容だ。近代では田山花袋が蕎麦の白い花と若く美しい狂女を組み合わせた小説を書いている。

そういえば「月の眉」ともいわれている秋の三日月は女性の眉を思い起こす。また中国文学では「朧」は美女の象徴であるという。しかし芭蕉はこれらのことを知っていても、句に烈しくは表現しない。仄かな花の色香が漂うていとどとどめている。これが芭蕉の目指した「軽

み、である。だから私はこの句は芭蕉らしい代表作だと思う。

蕎麦の次は唐辛子である。

1692年9月6日、膳所(大津市)の門人濱田酒堂(?~1737)が深川の芭蕉庵を訪ねてきた。これを機に松倉嵐蘭(1647~93)、岱水(生没不詳)の4人で四吟歌仙を巻いた。酒堂の江戸入りは、俳諧修業の進まぬ悩みをもつての訪問だった。いえば、若い酒堂は熟れた唐辛子のようはまだ赤くはない。若さは青さでよいのだが、酒堂自身は苛っている。しかし師の芭蕉は優しい。弟子の懸命ぶりが嬉しくもあり、励ましたくもなったのである。ちょうど、芭蕉庵の庭の、青かった唐辛子が。秋のこの時期ともなると赤く色づいてくる。その実は、青いままでもよいようなものだが、秋になれば自然と赤くなる。

青くても あるべきものを 唐辛子 芭蕉

(『俳諧深川』)

若い酒堂に向けての励ましの句であった。

1694年(51歳)5月11日、芭蕉は江戸を発った。

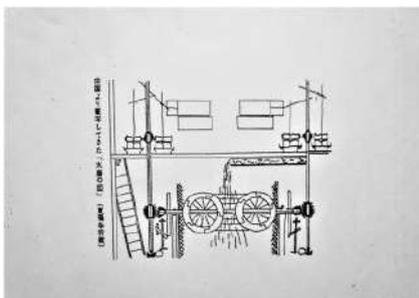
これが芭蕉最後の旅になろうとは…、神も仏もご存知ない。

それでも芭蕉は旅を続ける。14日に三島でこう詠じたが、大井川の増水で芭蕉は島田に4日間足止めをくい、塚本如舟(?~1724)に世話になった。

駿河路や 花橘も 茶の匂ひ 芭蕉

(志太野坡・小泉狐屋・池田利牛編『炭俵』1694年;『真蹟懐紙』)

そういえば、10年前は小夜中山(掛川市)にて「茶の煙」と詠じ、再びここ三島にて「茶の匂い」と詠じた芭蕉であるが、実は芭蕉は『石臼ノ頌』で駿河出身の聖一国師円爾と石臼のことを讃えている。石臼は円爾が南宋からわが国に持ち込んだ物であり、蕎麦、麦、茶を挽くための道具である。また円爾は静岡茶の祖でもある。芭蕉のことだから、`軽み、の奥にそのことを伏して詠じているのであろう。



～ 円爾の水磨様の図 ～



〔水磨様〕
静岡市復元の水磨様 ～



ほしひかる絵 ～

閏5月22日、芭蕉は第3回目の落柿舎訪問をした。

その日、芭蕉・酒堂・去来・丈草・素牛が「落柿舎乱吟」と題する歌仙興行を行った。そして閏

5月下旬、之道・去来・芭蕉・惟然・丈草・支考・野明が「落柿舎即興」題する歌仙を行い、また数日して、去来・浪化・芭蕉・之道・丈草・支考・惟然・野童・野明が歌仙を満尾した。

6月に、芭蕉が「二十五箇条」を書いて落柿舎去来に与えた。

芭蕉という人は、庵に芭蕉や栗の木や柿の木のある景色を好んでいたところがあるようだ。

この後、芭蕉は伊賀上野に帰省した。その折に伊賀の門人たちが合財して、生家の裏庭に「無名庵」という新庵を築造して芭蕉に贈った。お礼に芭蕉は十五夜の月見の宴を催した。献立は自ら書いたものだというから食に関係する者たちから注目されている。加えて現代から見れば俳聖芭蕉翁の「最後の晩餐」にあたる。それゆえに紹介する価値があるのだが、芋煮しめ、酒、のっぺい、吸物松茸、冷めし、取り肴、菓子、柿、といった精進料理だった。ただこの中に蕎麦が入っていればと惜しみながら、当時の料理を想像したいところだ。

9月3日、伊勢から門人各務支考(1665～1731)が斗徒なる弟子と共に伊賀上野にやってきた。芭蕉は二人への挨拶代わりに句を詠んだ。

蕎麦はまだ花で饗応山路哉

(服部沾圃ら編『続猿蓑』1698年)

支考の目的は芭蕉を伊勢に連れて行くことだったが、実際には芭蕉は大坂に行き、心ならずも伊勢には行けなかった。そのまま支考は芭蕉と行を共にして8日に奈良、9日には大坂へと移動、結局芭蕉がその地で没するまで師の傍を離れることはなかった。

9月9日、芭蕉は大阪で酒堂宅と、之道宅に泊まった。

10日、悪寒・頭痛を覚えながらも、連日弟子たちと詠んだ。

29日から下痢が始まった。

10月7日、全国の弟子たちに急が告げられた。

8日、芭蕉翁は最期の句を支考に示した。

旅に病んで夢は枯野を かけ巡る

(支考編『笈日記』)

辞世の句であることを思うと芭蕉の「遊泳感」を覚える。それでなくとも芭蕉には旅の自由さがあった。芭蕉の自由さとは常に何かを求めている姿勢であった。「不易流行」「寂び」「軽み」…。しかしほんとうの芭蕉は身体が弱かった。すぐ風邪をひくことが多かった。その身体で旅による求道の人生をおくった。そのためだけに生きた真摯な人生であった。それゆえに弟子たちから敬愛の心をもって「翁」とよばれた。

10日、芭蕉翁の様態は悪化。夜、遺書3通を代筆させた。

そして1694年10月12日(午後4時ごろ)、芭蕉翁は枕の上で夢を巡らせながらついに永眠した。

IV. 追悼蕎麦切

1694年11月9日、支考は阿経忌を催した。

『芭蕉翁追善之日記』に「生前にはただ蕎麦をのみ好みたまいて、ことに支考がふつつか

に打ちなして、細やかに手際ならぬを喜び申されれば、これ忌日もさるこの設けはなしけるなり。」と書き、支考が打った蕎麦を美味しく食べた芭蕉を偲んだ。

細いといえば、支考は「招魂賦」に「蕎麦切は、宇津の山道の細き手際に」と述べているから、細打ちの蕎麦が得意だったのではないかと思うとともに芭蕉もまたそういう細切りが好みだったと思われる節がある。



【宇津の山道】

また 1695 年 3 月 12 日、支考は江戸深川まで出向き、天野桃隣(1639～1720)とともに長慶寺(江東区森下)に詣で、「世にふるも 更に宗祇の時雨哉」(芭蕉 39 歳の句)の短冊を埋めて発句塚を建て、一周忌法要を行った。



【長慶寺】



【時雨の碑】

さらに 1696 年、支考らは京の双林寺で三回忌を行い、弟子として師の尊厳、人間として翁の死の尊厳を表した。

江戸では中村史邦(生没不詳;元犬山藩侍医)ら弟子たちが、深川芭蕉庵で三回忌を行った。史邦という人の素性はよく分からない。その句は単純であるが、師の芭蕉を喪った悲しみは手にとるように分かる。

河はあせ 山は枯木の 涙かな 史邦

(芭蕉翁追悼)

芭蕉会と 申初けり 像の前 史邦

(旧庵師の像に詠)

芭蕉会に 蕎麦切打たん 信濃流 史邦

ここでも追悼の蕎麦が出てくる。しかも「蕎麦切打たん」と詠じた芭蕉会が江戸の芭蕉忌の始まりになったというから、江戸ソバリエにとっては重視したい句である。

V. 落柿舎 蕎麦談義

ところで、私が芭蕉に関心をもったのは、蕎麦関係の本を読んでいるとき、「芭蕉が『蕎麦切は江戸の水によく合う』と言ったとされている」という文に遭遇したことからだった。それもかなりの頻度で出てくる。

「じゃ、芭蕉のその言葉はどこにある」と調べたが分からない。

そんなとき芭蕉を研究している方を知った。さっそく尋ねると「そんな話は聞いたことがない。もっとも私は蕎麦のことは分からないから」とやや門前払いの感じだった。ところが半年ぐらいしたころ、その方から「もしかしたら、これかな・・・」と電話が入った。

お会いすると『十論為弁抄』という本をお持ちになっていた。支考が著した蕉風俳諧論であるという。有名な著作だから図書館にはあるはずということだった。読んでみると内容は難解であった。

そのうちの第八段にこんなことが述べてあった。

むかし嵯峨の落柿舎にあそびて、談笑のついでに、都には蕉門の稀なる事をなげきしに、故翁は例の笑い笑い我家の俳諧は京の土地にあわず、そば切の汁のあまさにもしるべし。大根のからみのすみやかなるに、山葵のからみのへつらいたる匂さへ例の似而非ならん。此後に丈夫の人ありて心のねばりを洗いつくし、剛からず柔ならず。俳諧は今日の平話なる事をしらば、はじめて落柿舎の講中となりて箸箱の名録に入れしぞ。

落柿舎というのは先述の去来の別荘である。去来の「落柿舎記」には「柿の木40本あった」から名付けたと述べてある。この別荘に芭蕉は三度(1689年、91年、94年)足を運んだ。そのうちの2回目(91年)のときに「落柿舎記」を書いた。「向井去来の別荘は、嵐山の麓、大井川に近い所にある。去来はものぐさなので家の手入れはしない。だから家より柿の木の日陰がもてなしてくれる」。また支考も「落柿先生挽歌」を書いたほど、蕉門の人たちにとって落柿舎は重要な位置にあった。

そんなある日、落柿舎に弟子たちが集まって談義することがあったらしい。それはおそらく1994年の閏5月下旬のことだったのだろう。弟子たちが「京では蕉風俳諧がまだ受け入れられない」というようなことを言った。すると芭蕉は「蕉風俳諧と蕎麦切は京の土地に合わないのだよ」とやや批判気味に論じたというようなことだったらしい。

『十論為弁抄』を知ってから、他の史料を見てみると雲鈴(?~1717)も同じようなことを述べていることが分かった。

いずれも私が探していた「蕎麦切は江戸の水に合う」ということと書き方は逆であるが、文意は同じである。私は探し物はこれだろうと思った。

しかしこの史料を教えてくれたその人は「京の文学風土は蕉風俳諧に合わない」と記してあることは分かるが、そのことと蕎麦の関係は、私にはよく分からない」とおっしゃっていた。たしかにそういうところがある。多くの論文は俳句や芭蕉については追究してあるが、それが蕎麦との関係に及ぶことはほとんどない。だからこそ解決しなければならない。

そこであらためて、これまで述べた芭蕉時代の日本の蕎麦事情を振り返ると、江戸では蕎麦屋が開業し新しい動きが始まったばかりで、まだ全体的には寺方蕎麦とか会席蕎麦とか、自分で打った蕎麦というのが主流であったはずである。

たとえば1694年、5代将軍綱吉の生母桂昌院は神田錦町の護持院で接待されているが、後段は蕎麦切であった。また1697年に『本朝食鑑』が刊行されているが、その「蕎麦」の項では蕎麦汁は垂れ味噌であり、かつ薬味は「蕎切及び汁に大根の汁、花鰹、山葵、橘皮(蜜柑の皮)、番椒(唐辛子)、紫苔(海苔)、焼味噌、梅干等を和えて食べる」とある。

蕎麦が現在私たちが口にするような蕎麦になったのは、18世紀半ばごろからである。またそのころから江戸三大薬味といわれる大根・山葵・葱が出てきた。

しかるに、芭蕉は早々に大根、山葵こわをとり上げているし、さらにこんな言い方もしている。

剛こわからず柔やわらかならず

私はこの言葉に魅入った。これは江戸蕎麦の特色のいわゆる「腰」にあたるのだろうか。だとすれば、17世紀晩期の芭蕉が18世紀半ばの江戸蕎麦の独自性を予言するような発言をしていることに驚く。

歴史というものは、「末期」の人たちには沈滞感があるが、次の「晩期」の人たちは「夜明け」を見通す力をもつ人が出てくることがある。17世紀晩期の芭蕉がそうだったのだろう。

それと併せて、支考が特にとり上げた「剛からず柔ならず」ということが、支考の芭蕉の理解の仕方だったのだろうと、さらに興味がました。

『支考年譜考証』によれば、支考は9歳から19歳までを美濃の大智寺(岐阜市)の龍澤禅師のもとで修行し、下山還俗後は儒教・老子・漢学・神道などを学んだが、いずれも己の求めるものではなかったらしい。また支考の蕎麦打ちは僧侶時代に習い覚えたものだろうと私は推測する。そんな支考が芭蕉に入門(1690年;26歳)したところ、翁こそ自分が求めている道を指し示す思想・哲学の師となったのではないだろうか。

師の芭蕉は古典や中国文学に深く通じていた。であるのに、それを表に出さない「軽み」、すなわち重くない俳諧を目指していた。

翁は、支考が打った蕎麦切の「細やか」さを好み、また蕎麦切は「剛からず柔ならず」がいいと言った。つまり支考は自分の蕎麦切に蕉風俳諧の「軽み」を感じたからこそ、特にこの言葉を記述したのではないかと思うわけである。

最後になるが、当【蕎麦切 芭蕉庵】では、支考らが自ら打ってくれた家庭の蕎麦切、可伸庵や羽黒山の寺方の会席蕎麦切、そして江戸のけんどん蕎麦屋の商品蕎麦、と日本の蕎麦が全てが登場する。

いずれにおいても軽やかに啜って食べている芭蕉翁の姿が見えるようである。まさにこれが日本の蕎麦の姿であり、換言すれば「剛からず柔ならず」が日本の蕎麦の姿であると言えるのではないだろうか。

追記：本稿はエッセイとはいえ、一種の蕎麦論のつもりです。つきましては副題を「剛からず柔ならず」にすべきかと思いましたが、よく知られている「夢は枯野をかけ巡る」の方にいたしました。

[完]